

オホーツク海宗谷暖流情報

(H28(2016)年8月下旬)

H28(2016)年8月31日
中央水産試験場資源管理部
(担当: 海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

- 8/28-29に、宗谷暖流の弱勢(稚内と網走の水位差の顕著な減少)が再び観測されました(図1,赤矢印)。
- 8月下旬現在、オホーツク海沖合の表面水温がAtの好む水温範囲(5~15°C)をおおむね超えて上昇したため(図2), At出現のピークは過ぎたと思われますが、念のため、今後1~2週間は麻痺性毒性値の推移にご注意下さい。
- 「オホーツク海宗谷暖流情報」は今回で終了します。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

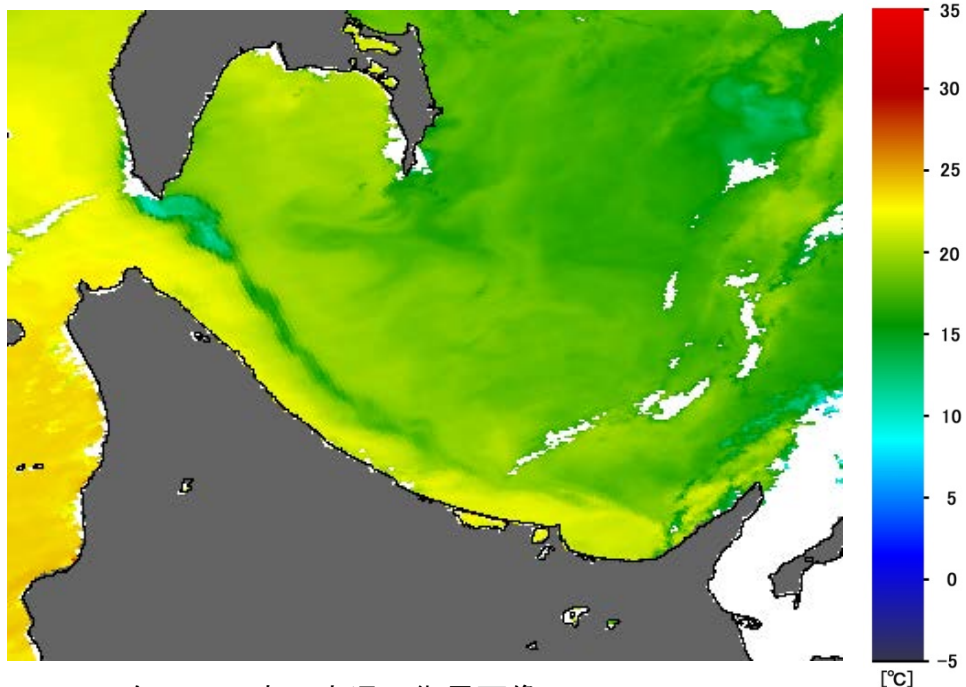


図2 H28(2016)年8/27の表面水温の衛星画像

(MODIS-Aqua, http://www.eorc.jaxa.jp/cgi-bin/adeos/modis_index.cgi より改変引用)

オホーツク海宗谷暖流情報

麻痺性毒性値の上昇にご注意下さい

(H28(2016)年8月中旬)

H28(2016)年8月12日

中央水産試験場資源管理部

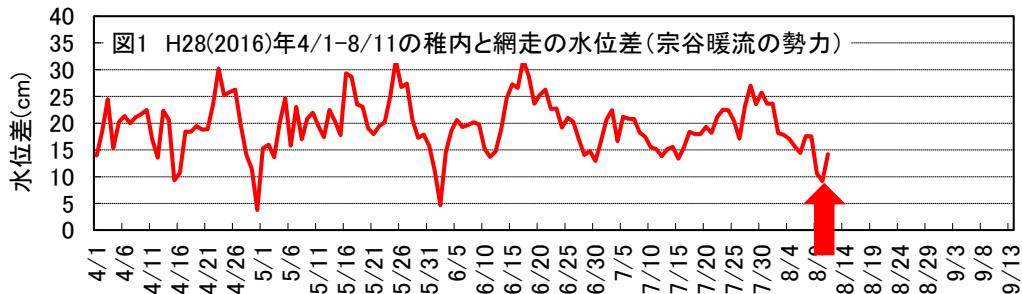
(担当: 海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

●8/10に、宗谷暖流の弱勢(稚内と網走の水位差の顕著な減少)が観測されました(図1,赤矢印)。

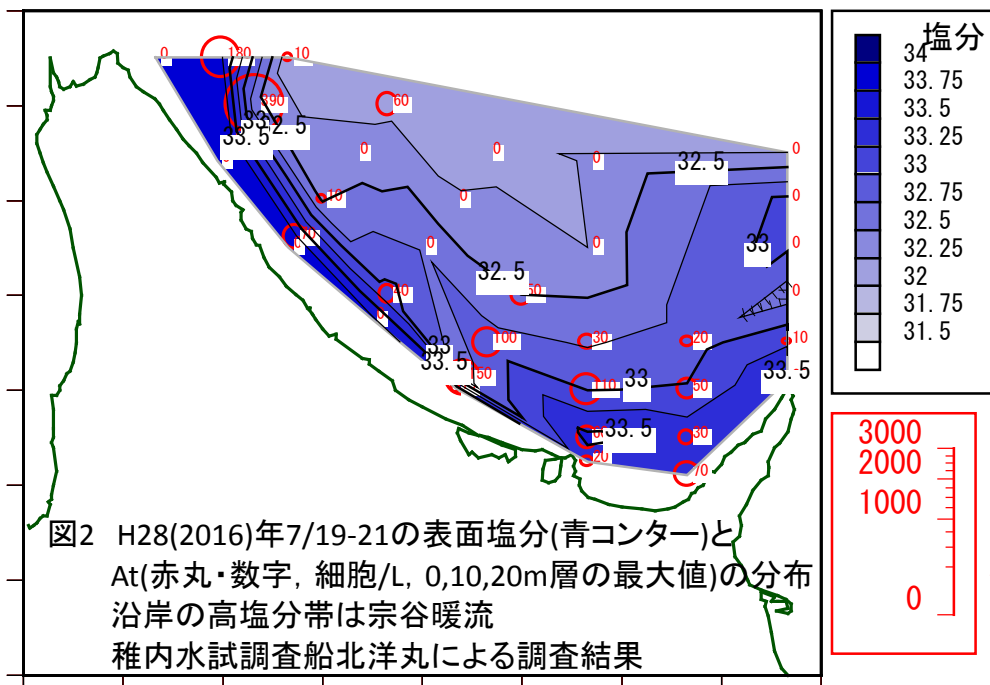
●宗谷暖流の弱勢が観測されたことから、麻痺性貝毒プランクトンAtを含んだ沖合表層水がホタテ漁場に流入して、地まきホタテガイの麻痺性毒性値が近日中に上昇する可能性があります。今後の毒性値の推移に注意して下さい。

●7月中～下旬の調査によって、Atは主に宗谷暖流外側のフロント域の表層に最高390細胞/L分布していることが分かっています(図2)。

●「オホーツク海宗谷暖流情報」は今後も適宜続報予定です。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。



赤数字と赤色円の大きさ:
At出現数

オホーツク海宗谷暖流情報

(H28(2016)年8月上旬)

H28(2016)年8月2日

中央水産試験場資源管理部

(担当:海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

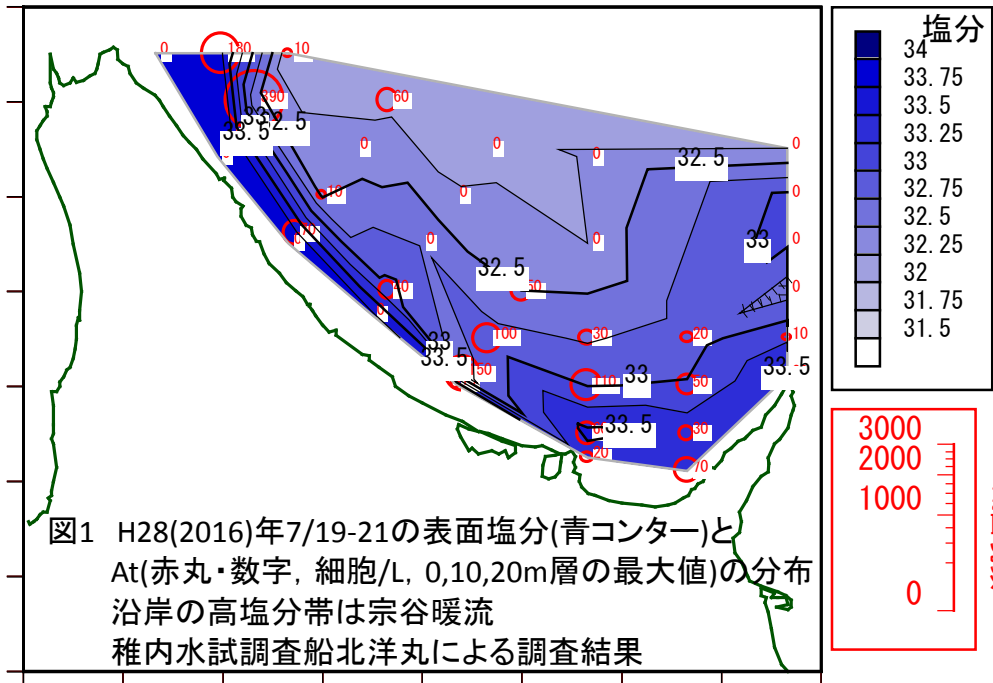
●7/19-21にオホーツク海で麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ, 略称「At」)の広域分布調査を行い, 試料の分析が終了しましたので結果を速報します。

●Atは, 36定点中21定点で主に0m層に最高390細胞/L出現しています(図1)。Atは, 沿岸を稚内から網走の方向に流れる宗谷暖流外側のフロント域に沿って分布しています。網走南部沿岸では, 宗谷暖流の内側にも, Atの出現が認められます。

●相当量のAtが出現していることから, 稚内から網走の方向に沿岸を流れる宗谷暖流の勢力が弱まれば, Atが沿岸のホタテガイ漁場に流入する可能性があります。

●7月下旬~8月上旬現在, 宗谷暖流の勢力は例年並み~強めですが(図2), 上記の結果から, 宗谷暖流の勢力が弱まれば, 麻痺性毒性値が上昇する可能性があります。今後の麻痺性毒性値の推移にご注意下さい。

●Atの広域分布調査は今回で終了しますが, 「オホーツク海宗谷暖流情報」を適宜続報する予定です。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており, この落差は, 稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

オホーツク海貝毒プランクトン速報

(H28(2016)年7月下旬)

H28(2016)年7月25日

中央水産試験場資源管理部

(担当: 海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

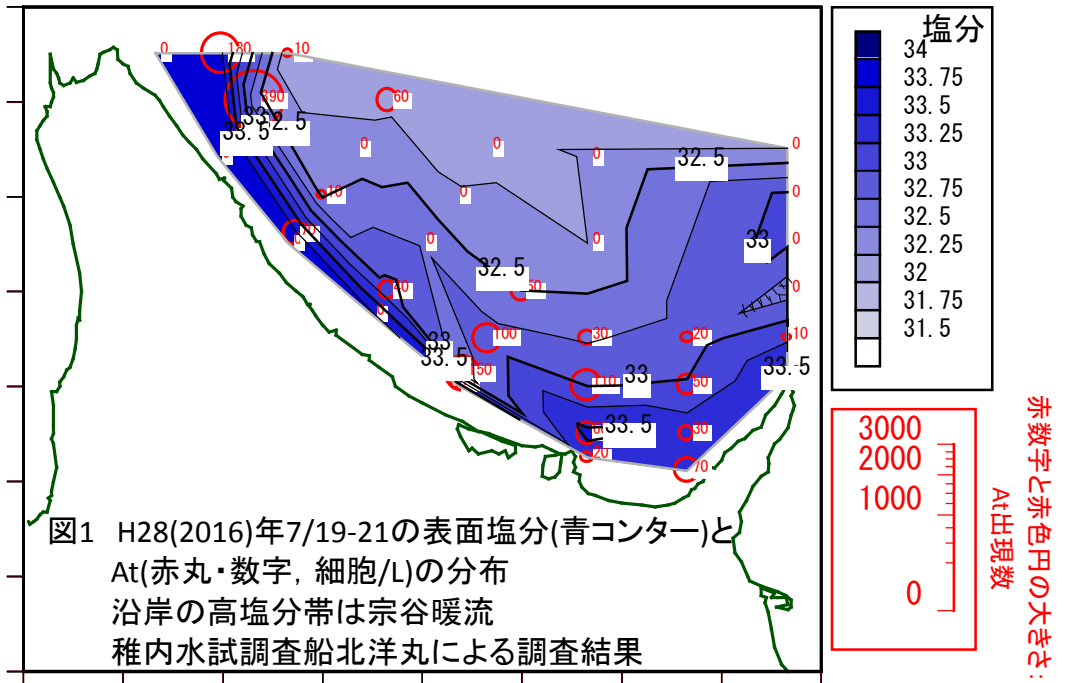
●7/19-21にオホーツク海で麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ, 略称「At」)の広域分布調査を行いましたので、まず表面(深度0m)について速報します。

●Atは、36定点中21定点で最高390細胞/L出現しています(図1)。Atは、沿岸を稚内から網走の方向に流れる宗谷暖流外側のフロント域に沿って分布しています。網走南部沿岸では、宗谷暖流の内側にも、Atの出現が認められます。

●相当量のAtが出現していることから、稚内から網走の方向に沿岸を流れる宗谷暖流の勢力が弱まれば、Atが沿岸のホタテガイ漁場に流入する可能性があります。

●7月下旬現在、宗谷暖流の勢力は例年並みですが(図2)、上記の結果から、宗谷暖流の勢力が弱まれば、麻痺性毒性値が上昇する可能性があります。今後の麻痺性毒性値の推移にご注意下さい。

●Atの広域分布調査は今回で終了しますが、深度10mおよび20mにおけるAtの出現状況と併せて、「宗谷暖流情報」として続報する予定です。



* 宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。

オホーツク海貝毒プランクトン速報

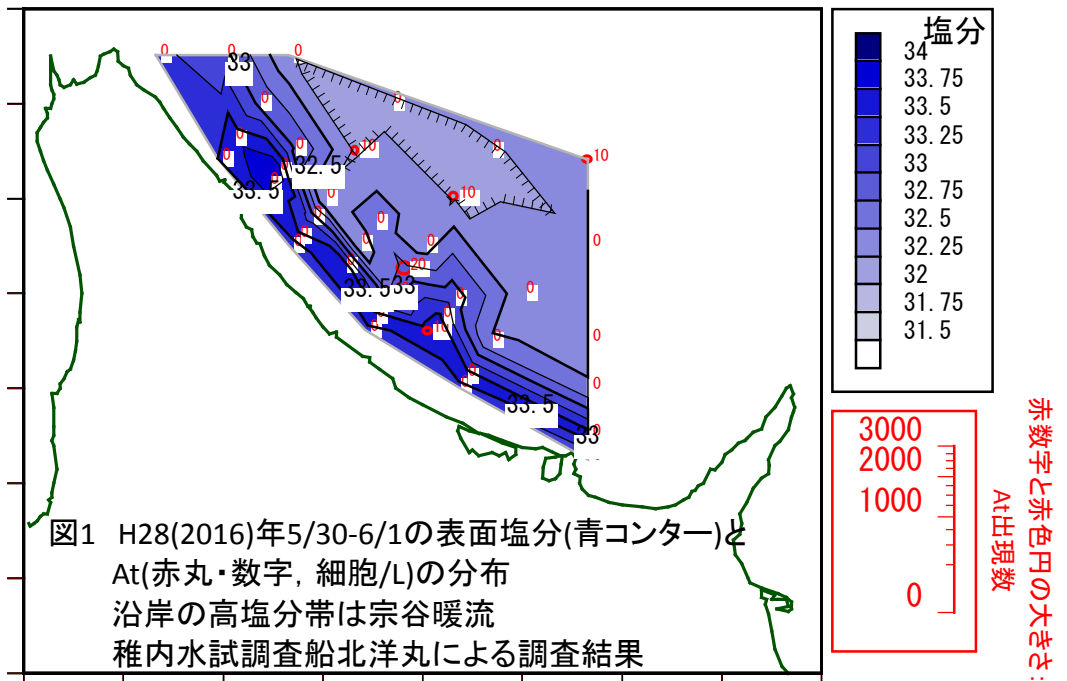
(H28(2016)年6月上旬)

H28(2016)年6月3日

中央水産試験場資源管理部

(担当:海洋環境G 嶋田・品田・佐藤)

- 麻痺性貝毒プランクトン(アレキサンドリウム・タマレンセ, At)の出現は、38定点中6定点における最高20細胞/Lの出現にとどまり、全般に低水準となっています(図1)。1定点あたりのAt出現数は1.8細胞/Lで、最近の麻痺性貝毒発生(出荷自主規制)年(H24(2012)年、1定点あたり15細胞/L)の12%の出現数にとどまっています。
- Atの出現が低水準であることから、稚内から網走の方向に沿岸を流れる宗谷暖流の勢力が弱まっても、麻痺性貝毒が発生する可能性は、現時点では低いものと推察されます。
- 6月上旬現在、宗谷暖流の勢力は弱めですが(図2)、上記の結果から、麻痺性毒性値が直ちに上昇する可能性は低いと考えられます。
- 次回のオホーツク海貝毒プランクトン調査は7月下旬を予定しています。



*宗谷暖流は日本海とオホーツク海の水位の落差が大きいほど強く流れることが分かっており、この落差は、稚内と網走の水位差で代表できることが分かっています。